

論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者	片岡 幸三
論文担当者	主査 波多野 悦朗
	副査 木島 貴志
	副査 廣田 誠一
学位論文名	Colorectal cancer treated by resection and extended lymphadenectomy: patterns of spread in left- and right-sided tumours (大腸癌根治切除例における原発部位によるリンパ節進展形式の違いの検討)
論文審査の結果の要旨	
<p>【目的】大腸癌では原発部位によって予後が異なることが近年明らかになったが、原発部位によってリンパ節転移パターンがどのように異なるかは未だ明らかではない。原発部位とリンパ節転移様式および予後との関連を明らかにするために以下の検討を行った。【方法】大腸癌研究会の1999年から2007年までのデータを使用し、D3郭清を実施されたpStage III結腸癌を原発部位によって右側と左側の2つの集団に分類し、さらに結腸癌のD1郭清領域にリンパ節転移をみとめる群をL1、D2郭清領域に転移をみとめる群をL2、D3郭清領域に転移をみとめる群をL3と定義した。L1からL2、L2からL3へと順にリンパ節転移がみられるパターンをSequential pattern、L1からL3または、L2のみの転移などにリンパ節転移がみられるパターンをskip patternと定義した。無再発生存期間および全生存期間はKaplan-Meier法を用いて推定し、原発部位ごとのL群およびリンパ節転移パターンと生存期間との関連はCOX比例ハザードモデルを使用して推定した。【結果】D3リンパ節郭清を伴う結腸切除を実施した病理学的stage IIIの結腸癌4034例（右側1618例、左側2416例）が解析対象となった。解析対象全体の5年全生存期間は右側が左側と比較して不良であったが（右側/左側77.4/80.9% hazard ratio 1.23(95%CI;1.08-1.40), P=0.002）、無再発生存期間はほぼ同様であった（69.9/70.7%）。右側では左側と比較して主リンパ転移（L3群）の頻度が多かった（8.5/3.7%; P<0.001）。リンパ節進展形式に関してはskip patternが右側において左側より多くみられた（13.7/9.0%; P<0.001）。多変量解析では主リンパ節転移陽性は左側結腸癌においてのみ全生存期間の予後不良因子であった（HR2.41（95%CI;1.67-3.47）, P<0.001）。またSequential patternは左側結腸癌においてのみ再発の予後因子であった（HR 1.46（95%CI;1.09-1.97）, P= 0.011）。【結語】原発部位によってリンパ節の進展パターンは異なる。原発部位に応じた、手術化学療法の集学的治療戦略が必要である。本研究は、臨床的にも意義ある研究で、今後の大腸癌集学的治療への応用も期待されることから学位論文に値すると判断した。</p>	